

台湾のスマート農業事情

歐元韻

台湾全土にて 265 店舗を展開しております台湾モスバーガーの経営母体である安心食品が 6 月 5 日の株主総会で、「植物工場」を新たな投資項目に加えることを正式に発表しました。グループ会長の黄茂雄氏がマスコミの取材に対して、現在、植物工場にて年間で 5 トンのレタスを生産しており、店舗用の野菜の品質及び安定供給を確保する為、今後、10~12 棟の植物工場を建設するとコメントしました。

今回は農産物の価格の安定化、食品の安全・安心及び過疎化対策に欠かせないスマート農業について取り上げてみます。

＜生産力 4.0 発展方案＞

台湾政府は 2015 年に各主要産業において IoT 技術や人工ロボットなどに代表される最先端テクノロジーを活用した産業構造強化を図り、各分野での生産力、競争力の向上を目指す「生産力 4.0 発展方案」を発表しました。世界的にも第 4 次産業革命の始まりといわれている現代社会で、ここ台湾でも同様の動きが見られます。農業分野における第 4 次産業革命、スマート農業も注目の産業分野として官民一体となって推進していこうとする姿勢が感じられます。

＜枝豆とパイナップル＞

台湾のスマート農業で日本に関する話題といえば、「緑のゴールド」と呼ばれる枝豆が 2017 年には輸出向け史上最高生産高 24.5 億元(前年比成長率 8.1%)を記録し、同時に日本向けの売上げでも 10 年連続でトップとのこと。台湾の枝豆は日本市場で 44.8%の市場占有率を誇ります。これも 10 数年かけて生産技術の機械化を推し進めると共に、スマート農業計画に基づいた自動操縦トラクター、多機能型農場管理機器、GPS 搭載枝豆収穫機等の導入を怠らなかったからとの説明です。



【GPS 搭載枝豆収穫機】

パイナップルと言えば、2013 年 12 月に東京の南青山で開業しましたパイナップルケーキの有名店サニーヒルズを連想される方も多いと思いますが、実は台湾のパイナップルは中国の消費者の間でも大変人気があることで有名なフルーツです。ちなみに 2006 年の生産高 15 億元から 2010 年には 250 億元にまで拡大しております。なかでも高雄の大樹区あります緑冠專業有機農場のパイナップルは中国最大のフルーツ卸売業者「佳沃鑫榮懋」社にて取り扱われており、その輸出販売価格は 15%もの伸びを示しています。

＜農業用観測分析システムの効果＞

この農場には土壌観測センサー、収縮式撮影機、気象観測所が設置され、温度、相対湿度、電解質に関するデータがモニター表示されるなど、農業用観測分析システム(Agri-Weather)にて管理されております。また中央气象台との連結により気象分析、害虫、作物の健康状態、災害等に関する情報提供も行い、農務作業記録アプリにてスマートフォンを通じた情報確認が可能です。

年々品質に対する要求が高くなっている中国の消費者にも信頼出来る生産履歴が提供できることで、アリババグループの生鮮食品子会社「盒馬鮮生」社も大変強い関心を示しています。

さらに重要なことは、過疎化が進んだ昨今では、他の地区に移り住んでいた原住民が地元に戻っても働く機会があるということです。報道によりますと、本システムを開発しました企業でも、将来的には台湾の農業専門家や多国籍企業との協力を得て東南アジア地区における遠隔農業管理システムを完成させ、全世界に広げたいとの事業構想を語っています市場競争でも優位に立っております。

＜おわりに＞

このように台湾ではスマート農業にはおいては後発組ではありますが、その流れに追いつこうとする歩みは今後益々加速していくものと思われます。中国、オーストラリア、カナダ及び東南アジア諸国への農業技術の売込み及び中国という巨大消費市場が近隣した位置にあるということも要因になるのではと考えたりもしております。